



1985

特別企画展



# 最上川

～紅花の道～

## 講演会

- 6月15日(土) 午前10時  
講師 柴田謙吾氏  
(最上川舟運研究者)  
「最上川舟運のあとをたずねて」
- 7月14日(日) 午後1時30分  
講師 新関岳雄氏  
(山形大学名誉教授)  
「最上川と文人たち」

## 映写会

- 7月7日(日) 午後2時  
「最上川のうた—茂吉—」「紅花はいま」
- 7月28日(日) 午後2時  
「最上川 やまがたの夏・秋を流れる」  
「紅花はいま」
- 8月18日(日) 午後2時  
「母なる川 最上川」「最上川風土記」

6月15日(土)～8月25日(日)

山形県立博物館

主催 山形県立博物館

協賛 紅花の山形路観光キャンペーン実行委員会

## 母なる川 最上川

### \* 一県一河川 最上川



「最上川」碑拓本

山形県民の歌、今上天皇御製「最上川」に「広き野をながれゆけども最上川 うみに入るまでにごらざりけり」とうたわれている最上川は、吾妻連峰を源とし、山形県を縦断しています。

上流を松川ともいい、白川・須川・寒河江川・鮭川・立谷沢川など大小の支流を合わせ、米沢・山形・新庄の各盆地を貫き、庄内平野を横断し、酒田で日本海に注いでいます。

長さ229キロメートルで全国第7位、流域面積は県の総面積の76パーセント、県民の78パーセントがその中で生活しています。

### \* 人々のくらしと最上川

最上川は、古くから山形県民のくらしと深くかかわってきました。

田畑をうるおし、魚獲をもたらすとともに、古くから舟運が開かれて、山形県の経済・文化の大動脈を果たす一方、渡船を必要とするなど交通の障害にもなり、また、大洪水で田畑や家屋が流されることもしばしばでした。

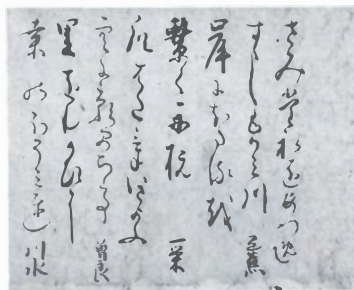
しかし、今日では、ダム建設や堤防工事、架橋が進み、発電や農業・工業用水への利用、さらに観光にと、最上川は、山形県民のくらしに欠くことのできないものになっています。



最上川峡船下り

## 最上川と文人たち

### \* 芭蕉と最上川



五月雨歌仙(部分)

松尾芭蕉(1644~94)は、元禄2年(1689)3月27日から9月6日まで、門人曾良と共に奥の細道を行脚し、山形県には5月15日(現7月1日)から6月26日(現8月11日)まで――

6月16日から2日間象潟に向った――全日程の4分の1にあたる40泊の長逗留をしました。

その間、大石田で句会を催して「さみだれをあつめてすずしもがみ川」にはじまる「五月雨歌仙」を巻き、本合海から最上川を下って「五月雨をあつめて早し最上川」の名句を残しました。

### \* 子規と最上川

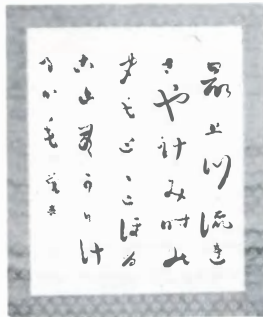
### \* 茂吉と最上川

斎藤茂吉(1882~1953)は、昭和21年1月から22年11月まで大石田に疎開、二藤部兵右衛門家の離屋を「聴禽書屋」と名付けて住まいしました。最上川をこよなく愛し、河畔を散策して多くの歌を詠みました。



子規句碑

昭和23年、自らまとめた歌集「白き山」には、「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも」や「おほきなる流れとなればためはず酒田のうみにそそがむとする」などの秀歌がおさめられています。



茂吉短歌掛軸

# 最上川の舟運

## \* 最上川舟運の発達



剣尖不動尊鱗口

『延喜式』に野後・避暑などの水駅の名がみえ、『古今和歌集』に「最上川上れば下る稲舟の…」の歌があって、古く平安時代には最上川の舟運が開かれ、遠く都の人々にも最上川が知られていたことがうかがわれます。

山形城主最上義光は三難所を開削して山形附近まで舟運を開きましたが、河村瑞賢による西廻り航路の開発は最上川舟運の重要性を増し、元禄7年(1694)には、米沢藩御用商人西村久左衛門の黒滝開削によって、置賜地方まで舟運が可能になりました。

## \* 最上川舟運の繁栄

村山地方に広い天領を持つ幕府や流域の諸藩は、城米や特産物を江戸や京・大阪に輸送するため、川船役所や船屋敷を設置し、手船を建造するなど、最上川舟運の整備に力を入れました。

艀船や小鶴飼船が往来して、米や特産の紅花・青苧などが積み出され、塩や木綿、すぐれた文物が運びこまれ、また、参勤交代や出羽三山参詣道者の往来にも利用されました。

鉄道が開通すると急に衰えましたが、最上川舟運は、酒田で海上航路と結ばれて、江戸時代から明治時代の山形にとって、経済・文化の大動脈の役割を果たしました。



新庄藩船印

## \* 河岸のにぎわい

最上川沿いには、米や紅花・青苧・塩などの荷物を積み降ろしするために多くの河岸や船着場が設けられました。

米沢藩の上米蔵や船屋敷が設けられた糠野目・菖蒲・左沢、山形城下の外港船町、庄内藩の参勤交代や出羽三山参詣道者の乗り降りにも利用された清水・清川、そして、河口の酒田などで、多数の大商人や船衆が集まり繁栄しました。

中でも大石田は、川船会所や幕府直轄の川船役所が置かれるなど、最上川随一の河岸として繁栄しました。

## \* 船衆のくらしと祈り

船持は船頭(船長)や水主(一般乗組員)を雇って川船業を営みました。

船頭や水主は、多くは沿岸村々出身の年季奉公人で、積荷が濡れれば弁償の責任を負い、病気になったり、事故などで死ぬと、代人を出したり、前借金を返済しなければなりません。船衆たちは船に設けられた小屋に寝泊りしながら上り下りしましたが、急流の多い最上川では、破船などの事故も多く、沿岸に金毘羅堂や船玉神社を祀り、堂舎に絵馬を奉納するなど航行の安全を祈りました。



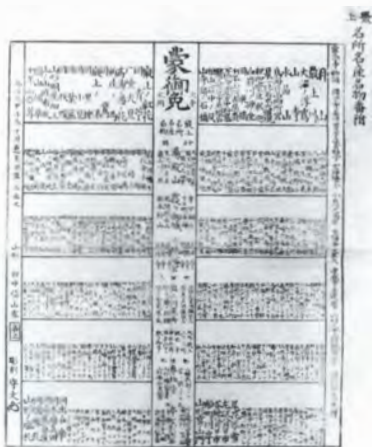
小鶴飼船押絵給馬

# 最上川と紅花

## \*最上紅花

江戸時代には、紅花は麻・藍と共に三草とよばれ、漆・桑・楮・茶の四木と並んで重要な商品作物として各地でさかんに栽培されました。

村山地方や置賜地方では、紅花・青苧・漆が特産物としてしられ、中でも、村山地方の最上川沿いの村々では紅花がさかん



最上名所産名物番附

に栽培され、全国産額の半分以上を生産し、品質もすぐれ、「最上紅花」ともてはやされました。

紅花の生産は、明治時代に入ると急に衰えましたが、江戸時代には、山形の経済をささえる重要な産物でした。

## \*紅花の道

最上紅花は花餅に加工されて、江戸に駄送されることもありましたが、大部分は最上川を下り、酒田から



紅花送手板とお守り札

日本海を運ばれ、敦賀で陸揚げ、琵琶湖を経て京都に運ばれました。

米などと共に上郷から積み下すこともありましたが、高価な紅花は、三難所を避けて、大石田まで羽州街道を駄送し、大石田から最上川を下すのがならわしでした。

山形や寒河江・谷地・天童などには多くの紅花商人が生まれ、村山地方はもちろん、仙南地方や南部地方の紅花をも京都に送り出しました。



紅花絵巻(部分)

## \*紅のいろどり

紅花は、口紅の材料であると共に、藍などとならぶ代表的な染料用植物で、とくに京染には欠かすことのできないものでした。

最上紅花の多くは江戸や京都に送られ、口紅や豪華な紅染衣装に染め上げられて人々の装いをきらびやかなものにしました。



紅地松竹梅に橘文様小袖

最上紅花の里山形にも、紅をつくり、売っていた紅屋があり、紅染めが行われていました。「最上名産千歳紅」・「最上名産玉紅」などの名が見え、「花染木綿」が三山参詣人の土産物としてもてはやされました。